患者さんの紹介～野上政義様～

北広島リハビリセンターに通いながら、版画制作や革工芸に取り組まれています。

「第 29 回（平成 22 年度）肢体不自由児・者の美術展」にて、「被爆前の原爆ドーム」と題した作品が、特賞の朝日新聞厚生文化事業団賞を受賞されました。

今号の表紙は、野上様が制作されました版画です。「第 32 回（平成 25 年度）肢体不自由児・者の美術展」で、厚生労働大臣賞を受賞された作品です。カラーでお見せできないことが、とでも残念です。

野上様が掲載されています「広報　北広島　2011.9.1」号を転載致します。インターネットでは大きな文字で読むことが出来ますので、是非そちらもご覧下さい。

（http://www.city.kitahiroshima.hokkaido.jp/hotnews/files/00006200/00006259/20110901_008.pdf）

腕が動く限り作品を作り続けたい

リハビリの傍ら 版画制作に打ち込む

野上　政義さん

のがみ・まさよし
里見町在住。
北広島リハビリセンターに通いながら、版画制作や革工芸に取り組む。昨年、「第29回肢体不自由児・者の美術展」で特賞の朝日新聞厚生文化事業団賞を受賞。

全国から集まった744点の応募作品の中から、特賞に選ばれた版画「被爆前の原爆ドーム」。北広島リハビリセンターの訓練室に飾られている

3カ月かけて作った大作の革工芸のバッグ。皮をたたいて馬の図柄を浮き上がらせる

リハビリに励む

7月末、障がい者支援施設「北広島リハビリセンター」の訓練室にリハビリ中の野上さんを訪ねた。肩や手を温めて血管を広げる療法を受けながら「15分続けますが、暑い日は大変です」と、ハンカチで汗をぬぐった。

筋力が徐々に低下する難病にかかっている野上さんは、症状の進行を少しでも遅らせるためリハビリに取り組んでいる。

難病を抱えて

体の不調を感じ始めたのは40代の時。札幌でタイヤの販売店を営んでいたが、店をたたみ、いくつもの病院を訪ね検査を受けた。10万人に1人しかかからない難病だと判明したのは4年前だった。

しかし、リハビリを受ける施設がすぐには見つからなかった。まれな症例で扱った事がないというのが理由だ。そんな中、北広島リハビリセンターは、初めての症例にもかかわらず受け入れてくれた。外来で通い始めた昨年3月ごろは筋力が落ちて車いすで移動し、言葉もうまく出ない状態だった。通所してリハビリをしている現在は、つえを使いながら歩けるようになった。「おしゃべりも楽しめるまでに回復したんです。ここまで良くなって感謝しています。北広島に住んで20年になりますが、高齢者や障がい者を支援する施設が充実しているのがいいですね」と穏やかな笑顔を見せた。

版画を始める

リハビリに版画を取り入れたのは昨年、入所者の版画作品を見て、自分もやってみたいと思ったのがきっかけだ。本を見て学び、以前旅行で訪れた土地の写真などを参考に彫った。2作目の「被爆前の原爆ドーム」を見た職員から美術展への応募を勧められ、出品。それが見事、特賞に選ばれた。知らせを受けた時は驚いたが、家族と喜び合い、東京で行われた表彰式にみんなで出席した。今年も美術展に応募しようと制作に励んでいる。

制作に夢中

版画のほかに革工芸にも取り組んでいる。小銭入れや腕輪、バッグなどが作れるほどに上達した。家族や世話になった方にプレゼントすることもあるそう。施設の仲間から「作ってほしい」と注文があると快く応じている。革を縫い合わせる時は、握力が弱いのでペンチで糸を引くなど苦労もあるが、作り始めると時間も忘れて没頭する。

「疲れるので、長時間の作業はできないですが、つい夢中になってしまいます。職員に『もう休みなさい』と言われることもあります」と笑った。

「腕が動くうちは、どんどん作品を作っていきたい。病気や障がいがある方も、私の作品を見て、自分も何かやってみようという気持ちになってくれれば…。こうやって好きな事をさせてもらえる自分は幸せだと思います」

いつも明るく

施設内で会う人ごとに必ずあいさつをすることにしている。「返事をしない人がいても、私はします。うるさいと思われているかもしれませんが。明るいことが私の取りえですから。これからも楽観主義でいきます」と話す。

次の美術展に応募する版画のテーマは広島県尾道市の風景。心温まる作品が生まれるのが楽しみだ。

人森